

27 建国大学 3

すでに述べたことであるが、建国大学赴任によってその後私の運命の上にもたらされたものは、非常に広汎深刻にしてかつ長期に及ぶゆえ、建国大学そのものに付いての記述に、余り深入りすることは出来ない。されど前後七か年という一応の歳月を過ごしたゆえ、多少は触れる必要もあろう。

着任早々の出来事の一つは、塾生らが私をロバに乗せて近郊の農村地帯まで連れて行ってくれたことである。もちろんロバなどというものに乗ったのはそれが初めてであって、その時はすでに数え四十四才だったことを思えば、それが私にとって如何に印象深き出来事であった知っていただけるだろう。

それと共に私にとって四十余年の今日に至るまで忘れ難いことは、初秋のころ北方の国境地帯近くまで、全学を挙げて勤労奉仕に行ったことであった。かような事はその後はなかった。その時は副総長の作田先生ご自身がご参加されたので、全学の志気は大いにあがった。八月といえど北部の国境地帯は、色とりどりの秋草千々に咲き乱れて、一脈の旅愁を覚えた記憶がある。同時に、その時の記憶に残りて忘れ難きは、路上至るところにメノーが落ちていたことであって、これは近くを流れる黒龍江の支流にメノーが多いためであった。その際私も幾つかを拾って持ち帰った。

建国大学では、私の講義科目の性質上、一年中講義があったので、満州国内も余り多くは知ることが出来なかった。これに反して他の教官方の多くは、蒙古地方はもちろん、遠く北京その他中国の各地に足を伸ばした人も少なくなかった。私はついに北京をも訪ねることが出来なかった。かくて私が満洲国内の主なる都市を訪ね得たのは、主として満鉄の依頼によって講演をたのまれた機会であった。それらのうち、今尚印象深く残っているのは、ハルピンくらいのものである。ハルピンは、主として開拓地と青少年義勇軍であった。

そのうち今尚、私にとって忘れ難いのは、当時勃利の開拓団の団長であった人で予備の陸軍少将であったが、この人は単なる軍人ではなくて、何事もよく心得た床しい一人の「人間」であった。

しかしそれ以上に、私にとって懐かしいのはかの青少年義勇隊にて、その時相知った道縁であって今尚最も関係が深いのは永井幹夫氏であって、実に終生の盟友と言うべし。

尚勃利にて相知った人で、それが縁となった薙刀くずしと、後無銘の志津三郎を贈ってくれた人があるが、惜しむべし、引き揚げ後数年ならずして、郷国の大分県で亡くなられた。

尚今一つ、勃利に泊った時、私はたとい運命によって満洲の辺境の一都市勃利に住まねばならなくなっても、「私の学問は必ずしも不可能には非ざるべし」と考えた。思うに「全

一学」の萌芽はその頃すでに芽ぐみつつあったからであつたらう…。